言葉の耳袋（6）
読書ノート ： 読んで・書いて・語って

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA　顧問　教育アドバイザー
張江　幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。
このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

【1】読書ノート・・読んで・書いて・語って

(1) 作文がかけない

カラカスに６年いた米田さんは、アメリカンスクールに７年間通っていた。高校時代はトップの成績をあげている。両親が大変な読書家であったので、米田さんも日本語の本もずいぶん読んでいる。高校を卒業して帰国し、Ｊ予備校に通った。日本語の論文を書くコースで、最初の論文の評価が最低であったので、相談室を訪ねてきた。拝見すると小学校３年生くらいの作文レベルであった。今までの国語の勉強もそこそこにしており、漢字対策もしてきている。しかし、日本文を書く経験は少ない。ある漢字がどのような前後関係の中で使われているのかが良くわかっていない。

そこで勧めたのが読書ノートの作成でした。最終目標の大学は国立であったので、まだ半年は準備ができる。論文講座に通う傍ら、私の助言を完全に実行し、ご両親も協力してくれました。

(2) 読書ノートとは

本を読むことは好きでも、作文が嫌いという子どもは意外と多いものです。台北日本人学校時代に飛びぬけて作文がうまいクラスがあった。その担任が西川先生であった。かれは長い間、読書ノートの指導に情熱を燃やしていた。爾来、わたしもその真似をして読書指導をしてきたが、たしかに効果はあった。その内容とは・・・

1、専用のノートをつくる。
2、本を読み終わったら、その本から、次のことを書き写す。
　① 書き出しの文節
　② 最後の文節
　③ 読後に一番印象に残った文節
3、書き終わったら、必ず親に読んで、聞いてもらう。

【2】書き出しの文章・・

どの作者も書き出しには頭を悩ませる。本を開いた読者の心をぐっと掴みたい。小学生から大作家まで、文を書く人の共通の悩みの種である。書き出しが出来たら、ほとんど完成したようなものだという作家もいるくらいです。いくつかの作品から引用しましょう。

(1) 風の又三郎（宮沢賢治）

九月一日。
どっどど　どどうど　どどうど　どどう
赤いくるみも吹き飛ばせ
すっぱいかりんも吹き飛ばせ
どっどど　どどうど　どどうど　どどう
谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが、生徒は一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートくらいでしたが、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼ冷たい水を噴く岩穴もあったのです。

※ 初めの詩を声に出して読んでみてください。それだけで何かが起こる予感でわくわくしてきます。小さな学校なんだ。でも後ろには草山。きゃあきゃあ言いながら遊んでいる子供達の姿が浮かんできます。そこへ又三郎がやってくるんだ。どんな子どもなのかなあ。さあ、早く読み進めようと思いませんか。

(2) 坊ちゃん（夏目漱石）

親ゆずり無鉄砲で子どものときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて腰をぬかしたことがある。なぜそんなむやみをしたかと聞く人があるかもしれぬ。べつだん深い理由もない。新築の二階から首をだしていたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛びおりることは出来まい。弱虫やーい。とはやしたてられたからである。小使におぶさって帰ってきたとき、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛びおりて腰をぬかすやつがあるかといったから、このつぎはぬかさずに飛んで見せますと答えた。

※ 主人公坊ちゃんの人柄が、この書き出しでアニメから飛び出してきたかのようにわかる。無鉄砲、べつだん、時分など、いまでは使われない言葉でも、前後の関係で十分理解できる。内容もさることながら、ことばの使い方がうまい。ページを繰る手が早くなります。